# 姉のちわたし、ときどき母（娘と母の小噺）

前川美和

わたし、吉本知佳は二十四歳。大阪のマイナーな大学を卒業後、銀行に勤めて丸三年が過ぎた。一年は花の窓口にいたが、今は営業担当で毎日電動自転車にまたがり、真夏の炎天下も真冬の木枯らしの中も、投資物件を片手に、個別訪問に明け暮れている。ベテランのおじさんと一緒に行くことが多いが、一人で知らないお宅に上げてもらい、知ったかぶりの説明をして、優良株を勧めることもある。素人でも株について詳しい手ごわい相手もいるので、しっかり勉強し、新しい情報を得るため、アンテナを張っておくことが求められる。母は、「一人で見ず知らずの人の家に入るなんて、あぶないやろ。逃げ場ないのに。何かあっても、会社、責任とってくれへんねから、二人で行かしてもらい」とわたしの貞操を心配しているが、今のところそんな状況になったことはないし、母の取り越し苦労だと思う。しかし、持っている人は持っている。人は見かけによらないというが、全くその通りで、長屋に住んで、地味ななりのおばあさんが、たまげるような額の投資をすることは少なくない。

姉、吉本奈美は二十八歳。地元和歌山の大学に進み、ゼミの教授の「講師という形で学校に入っとけ。口利いてあげるから」という親身な忠告に耳を貸さず、卒業してしばらく介護施設でバイトしながら、プラプラしていたが、その間に社会福祉士という資格を取り、市役所の採用試験に挑戦した。久し振りに問題集を買って来て、付け焼刃の試験勉強をしていて、分からないところがあるたびに、母に質問して嫌がられていたが、見事に合格したのだ。周りの人からは「どんなコネ、使たん？」などと嫌味を言われたようだが、彼女はそんなことでひるむ玉ではない。

「実力やん。本番に強い女やから、面接なんて大得意やし。人も羨む公務員やで」と鼻高々。しかし、福祉の現場は想像を絶する世界で、残業等による肉体的な疲労に加え、生活保護の受給をめぐる個人とのやり取りは精神的にかなりきついらしい。

きょうはその姉の結婚式。

吉本家の控え室に入ると、白いウェディングドレスに身を包み、しっかりメイクしてもらった姉が、主役になりきって余裕の笑みを浮かべていた。一般的に女性は結婚式を前にすると、涙ぐましいダイエットなどして、やせてきれいになると言われているが、姉の場合は逆に、今までにないくらいパンパンに肉がついている。姉は目鼻立ちがくっきりとしたなかなかの美人なのだが、ウェストのくびれとは無縁のキューピー体型をずっと維持している。きょうは一段と堂々としたキューピーぶりだ。

「わたしって鎖骨の辺りだけはやせてるから、ほっそりしてるように見えるんよ。着やせするタイプかな。太ももにセルライトあるとは誰も思わんよ。ウッホッホ」

と見えるところさえよければいいという彼女のポリシーが見え隠れする。

昨夜は大変だった。父と姉のバトルがあったのだ。姉の知らない間に父と母が姉の部屋を片付けて、ベッドの下から出てきた段ボール二箱分の手紙の山をゴミに出そうと、まとめて置いてあるのを姉が見つけたのだ。

「この手紙、どうするん？」

「捨てるんや」
「わたしのいない間に、あちこち触ったん？」
「明日結婚式や。家を出るまえにきちんと片付けとけって言うたのに、放りっぱなしやったから、お母さんと片付けたんや。一日がかりやったぞ」
「わたしの手紙、勝手に捨てるなんて、あり得んわ」
「そんなに大切なものやったら、自分でなんとかしとけ！」
「この家にはプライバシーないんか。小さいときからアホの一つ覚えみたいに『片付けろ。片付けろ』って」
「この家はオレの家や。一緒に住むんやったら、部屋をきれいに使うべきやろ」
「住まわせてやってるとか、育ててやったとか、親が子どもを育てるのは当たり前やろ。いつもいつも恩着せがましいのよ」
「なんや偉そうなこと言って。おまえの結婚式なんか出るか！」
「出てもらわんでええわ！」
二人とも興奮しまくって、母が「二人とも、口、閉じて！」と何度も　止めに入っても、二人は大声で喚き散らす始末。
結局、喧嘩したまま寝てしまった。ドラマによくある嫁ぐ娘の両親への挨拶もスルーして、二人とも険悪な雰囲気を引きずりながら会場に入った。姉は夕べ泣きすぎたせいで腫れぼったい目をしている。必死に氷で冷やした努力も効果が無かったようだ。
父と姉の大喧嘩は時たま勃発するのだが、そのたびによくあれほど熱く罵り合えるものだと感心させられる。似た者同士だからかもしれない。二人とももっと大人になってほしいものだ。

姉はなぜか父も含め、男を本気で起こらせる特技を持っている。ファミレスでバイトしていたときもも仕事中にトラブッた同僚の男に待ち伏せされて蹴られたことがある。姉は鼻で笑って
「本当のことを言うただけやで。大当たりやったからこそ、頭にきたんとちがう？」
と反省のはの字もない。コンビニで働いてたときは、ストーカー的な客に殴られ、警察沙汰になった。
「男のプライド、真正面からズタボロにしたら、後が怖いよ」
と忠告するのだが、
「男にはきびしいんよ、わたし」と聞く耳を持たない。
そんな勇ましい姉と結婚する勇敢なタッちゃんに両親もわたしも感謝している。
姉とは四歳離れていて、わたしが物心つく頃には彼女はもう小学校に通っていたので、遊んでもらった記憶はあまりない。成人してからはショッピングや小旅行など行動をともにする機会も増えたが、当時の彼女は学校から帰ったら、すぐにどこかに飛び出していくタイプだったので、一緒にいる時間が少なかった。母もあえて姉に妹の世話をするようには言わなかった。姉には姉の生活があるから、妹と遊ぶのを強いるのはよくないと思っていたらしい。
そんな活発な姉にも辛い時期はあった。幼稚園の視力検査で左目がほとんど見えていないことが分かったのだ。母は振り返る。

「右目蓋したら、お母さんの顔もボーッとしか見えへんて言うから、ショックやったわ」
視力回復のため、一年ほど右目にガーゼを当てて、度のきつい眼鏡をかけていた。知らない大人から「かわいそうに。どうしたん？」とよく声をかけられたそうで、母は
「移る病気と思われたないから、いちいち説明してたけど、面倒くさかったわ。ガーゼにマジックで眼帯してる理由、書いときたかったわ」なんてひどいことを言う。
幸運にも、視力は少しずつ出てきて、まずガーゼがはずれ、六年生には眼鏡も要らなくなった。そのとたん、彼女のモテ期が到来したのだ。クラスの何人もの男の子から告白され、周囲のあまりの変わりように、その頃を思い出しながら、姉はよく言ったものだ。
「人間、顔じゃないよ、中身だよとか言ったって、現実は外見で判断するんだよね」
姉は小学生にして人間の本性を垣間見たのかもしれない。
しかも、その頃から担任の先生ともうまく付き合えるようになったようだ。四、五年生のときの担任は毎日学級新聞を出すような熱血教師。ストップウォッチを握って、毎日行われる百マス計算、忘れ物グラフの導入。意識していないが萎縮していたようで、時々自家中毒を起こし、噴水のように嘔吐することがあったのだ。六年生にかかった女の先生については
「ちょっとえこひいき、きつくて苦手な先生やったけど、先生、先生って甘えてみたら、すごく優しくなったんよ。先生も人間や、扱い方次第やな」と手厳しい。
わたしも小学生のときの担任の先生に「知佳ちゃんは何考えてるか分からん子や」と突き放されたり、逆にひいきされて、クラスのみんなから白い目で見られたりしたことがあるから、はっきり言って、先生のイメージはよくない。母に至っては何か恨みでもあるのか、
「先生ってクサイんよ。先生臭とでもいうんかな。どうしても相容れないものがあるわ。先生になろうかという人は、変に真面目で偏った正義感を持った頭の固い人が多いんとちがう？自信だけはたっぷりで。お願いやから、学校の先生とは結婚せんといてや」ということになる。聞けば、小学校から高校まで尊敬できる先生に出会えなかったらしい。裏を返せば、「先生」への期待が大きすぎたのだと思うのだが・・・。
中学、高校と姉のモテ期はピークを迎えた。確かに当時の姉は、ショートカットの似合う、スリムな可愛い女の子だった。彼女の相手は、ジャニーズ系のかわい子ちゃんからスポーツマン、教師と幅広かった。
中学三年生のクリスマスイブに金髪の毛をおったてた筋金入りの不良が家に告白しに来たことがあった。わたしと母はワクワクして待っていた。夜も更けて辺りは静まり返るなか、ブーツのチャッカチャッカという音が近づいてくる。チャイムが鳴ると、姉がそそくさと表に出て、しばらくして戻ってきた。チャッカチャッカと足音が遠ざかっていく。
「えっ？断ったん？」と母とわたし。
「ちょっと、ちょっと。どうせ怖いもん見たさやろ？あんな不良、嫌やわ」
「チャッカチャッカ鳴るブーツ履いて、かわいいやんか」
母はいわゆる不良と係わり合いになる楽しみを取り上げられて、いたく残念がっていた。
姉のモテ話をもう一つ。これはわたしにとって、ちょっぴりほろ苦い思い出だが、姉が高校生で、わたしが中学生の頃、父の同僚の家族とスキーに行くことがあった。その一家とは以前から一緒にスキー旅行することがあったのだが、その時子どもたちは思春期真っ

只中にあった。向こうの子どもは二人とも男の子で、お兄さんの和也は姉より二つ上で、弟の「タッちゃん」こと拓也は姉と同い年だった。兄弟そろって背の高いイケメンで、性格もよく、すてきな二人だった。

ある日、拓也と姉とわたしで三人乗りのリフトに乗ることがあった。わたしは拓也にほのかな恋心を抱いていたので、心をときめかせていた。その日は真っ青な空が広がり、リフトに揺られている三人の目の先には薄いベールのような雲が何層にも重なって、太陽の光で輝いていた。

「きれいな雲ね。あの向こうにはおとぎの国があるみたい」

突然姉が夢見がちな乙女の顔で言った。わたしは「はあ？？？」と姉の顔をまじまじと見た。家で寝転がって、鼻をほじりながら、お尻をボリボリかき、辛辣な男論をぶちあげているくせに、口が腐りそうなメルヘンチックな台詞を恥ずかしげもなく口にする姉。「ゲエッ」と思いつつ、拓也のほうを見ると、こっちもうっとりと微笑んでいる。姉と拓也が同じように遠い目をしているのを目撃し、わたしは自分の敗北を思い知らされた。その後、姉はいろいろな男と付き合いながらも、拓也とは連絡を取り合っていたようで、今日のめでたい日を迎えられたのだから善しとするが、わたしの初恋は姉によって無惨にも蹴散らされてしまったのだ。

姉は大学に入って太り始めた。それを見て、わたしは「こいつも終わりだな」とほくそ笑んだ。

「お母さんは大学で六キロも太ったんよ。ある日、電車の中で中学のとき好きやった男の子とバッタリ会ったんやけど、『太ってて分からんかったわ』って笑われて、滅茶苦茶ショックやったわ。大学時代は太る時期みたいやから、気をつけてな」と母に口を酸っぱくして忠告されていたにもかかわらず、姉は堂々と七キロ太ったのだ。ところが、わたしの期待に反して、その状況でも姉の周りから男が絶えることはなかった。

そして、父の留守を見計らって、夕食にボーイフレンドを招くのが常だった。母はいそいそと晩御飯つくりに励み、若い男の子たちには優しく接した。男の子が帰ったあと、姉はわたしと母に必ず感想を求めた。わたしたちは

「ちょっとしゃくれてるな」

「ナイーブなナルシストとちがう？」

「イマイチやな」とか言いたい放題。

一度バイト先の男の子を紹介されたとき、母は玄関でその子の顔を見るなり、「ゲェッ！」というような表情をして固まっていた。母は顔がうるさいのだ。あとで、「どこから見ても百パーセント、不細工やで。顔のパーツがバラバラやん。もうちょっとましなん選んだら？」などと失礼なことを言った。

父を見ると、そうでないことは一目瞭然なのだが、自称「面食い」の母は、背が高く無駄な脂肪がついてなくて、横顔が美しいことが理想の男性像らしい。わたしの好きな阿部寛についても

「いい感じなんやけど、横顔がイケてない。惜しいな」となる。でも、姉は鼻息も荒く力説する。

「ハンサムな男はあかんわ。ハンサムな男とかきれいな女は、小さいときから周りの人に可愛い、可愛いって言われて、チヤホヤされて育ってきてるんやで。自分が人より美しい

ことが分かってるし、価値あることも自覚してる。そやから、周りの人が自分を特別扱いするのを当然やと思ってる。特別扱いされんかったら、なんで？って顔するんよ。そんなやつらと付き合って、面白いはずないやろ」

母も負けてはいない。

「なるほど、そうかもしれへんな。そやけど、はじめっからターゲットのランク下げて、不細工なんばっかりものにしても仕方ないやろ。知佳はどう思う？」

「やっぱりかっこええ人がいいな。佐藤健みたいな」

母の中に「佐藤健」の情報は入ってなかったようで、一瞬「ん？」という目になったが、言ってることは自分と同じということで満足げな顔をした。姉は小バカにして

「子どもよのう」とつぶやいた。

母とわたしにどんな厳しい言葉を吐かれても、姉は交際相手を我が家に連れてくるのをやめなかった。昔飼っていた猫が自分の捕まえたモグラやスズメを居間のピアノの横に持ち込んで、その隣で得意げに毛づくろいしていたのに似ている気がした。ただ、姉は捕った獲物には尽くした。どの彼氏の誕生日にもケーキを焼き、クリスマス前にはマフラーを編み始めたりと、相手のために自分の時間と労力を費やすことを惜しまなかった。夜遅く帰ってきてから、「ケーキ作らなあかん」と騒ぎ、わたしも何回か手伝わされた。

姉の様々な恋愛模様の観察を通して、わたしの得た結論は、恋愛を成就させるには「分相応」と「演技力」と「まめさ」が不可欠だということだ。

わたしにはその三つの要素が欠けていたからか、中学、高校と男の子と長く付き合うシチュエーションにはならなかった。わたしだって姉に負けず劣らず可愛い顔をしているのに、モテた経験はない。母に言わせると

「知佳は丸顔やからな。バレーボールみたいに球形や。赤ちゃんの頃とおんなじ顔やな。可愛いんやけど」となる。笑いながら発せられるその一言がどれだけ娘を傷つけているのか考えもしなかっただろうが…。

しかし、短期間の付き合いなら、あることはある。中学生のとき、野球部の真面目な男の子から告白された。憎からず思っていた子だったから、付き合うことにしたが、「付き合い方」がよく分からなかった。毎日学校で会っているのに、毎晩電話がかかってくる。まだ携帯など持っていなかったので、家の電話にかかってきて、母や父や姉に取り次いでもらうことになる。父は不機嫌な顔で、母と姉はにやけながら受話器を渡し、そばで聞き耳を立てていた。おもむろに電話に出るのだが、話す話題も見つからず、「うん」とか「はあ」とか答えるだけで、三分ももたない。姉は

「なんや今の。会話？あかんやろ」とつっこむのだが、「話すこと無いもん」ということで、面倒くさくなって、一ヶ月足らずで別れた。「まめさ」の欠如。

高校のときはクラスで一番人気のあるハンサムな男の子が「一緒に勉強しよう」と言って、家にきたことがある。日頃男っけのないわたしの彼氏が来るとあって、父も母も姉も興味津々。父は特上のイチゴを買いに走り、母も腕によりをかけてランチを作った。姉も品定めしてやると手ぐすね引いてスタンバイしていた。彼がやってくると、姉のウェルカム質問を皮切りに、皆で根掘り葉掘り個人情報を聞きまくり、彼をいたぶるような形になってしまった。

「知佳の姉ちゃん、怖っ！」と即振られてしまった。母は
「かわいらしい子やったのに」と振られたことが不本意のようだったが、姉は
「あの子はあかんわ。高校生のくせに有名ブランドのメッチャ高い靴履いてたで。シャツもブランドや。オシャレすぎ。甘やかされた金持ちのボンボンや。やめといて正解！」とバッサリ切った。家族にはもっと静かに見守ってほしいと思いつつ、経験豊かな姉の洞察力には脱帽した。これは「分不相応」。
　姉は地元の大学に進んだので、実家に留まり、父とぶつかり合う羽目になったが、わたしは大学進学と同時に家を離れ、いわゆる「一人暮らし」を始めた。１Ｋのアパートの一室が自分だけの空間となり、新しい物語がそこから紡ぎだされることになった。初めは寂しかったが、自由がうれしかった。そして、遅まきながら「大学デビュー」し、弾けた。大学時代のサークルは四年間の生活を左右するといっても過言ではないが、わたしの入部した軽音楽部はかなりおもしろいサークルだった。そこで、初めてベースを手にし、ロックの世界にどっぷり漬かっていった。
　小さい頃、ピアノを習っていたおかげで、譜面が読めるので、ベースもすぐにある程度弾けるようになったし、絶対音感があるから、曲を聴いただけでコピーできた。ツェッペリンやディープ・パープル、クィーンといった往年の名曲をコピーしたり、オリジナルを作ったり、音楽談義に花を咲かせたりと大学生活は音楽を中心に回っていた。
　実家では姉がよくしゃべるので、わたしは自然と口数が減って、聞き役になることが多かったが、サークルでは対等にいろいろ話せた。わたしが丸顔で幼く見えるからか、先輩たちは「知佳ちゃん、知佳ちゃん」とかわいがってくれた。サークル仲間は互いのアパートをよく行き来して、いっしょにごはんを作って、借りたビデオを見たりした。
　中でもまる子とは同い年だし、アパートも近かったから、どちらかの部屋でガールズ・トークを繰り広げながら、酒盛りをすることもたびたびあった。
「知佳、オサム先輩、チョーかっこいいよね」
「うん、いい曲作るし、才能あるよね」
「プロ、目指してるんだって。バンドで」
「プロは難しいんとちがう？」
「プロデビューしようと思ったら、何が要るんかな」
「曲、プラス、ルックスやろな。四人メンバーとして、ドラムは体力仕事やから別格として、少なくても二人は背の高いイケメン、揃えんとな。ハンサムなボーカルは必須条件と思うよ」
「ルックスか。わたし、ちょっと太めだし」
「女の子はポッチャリがええよ」
「せめて髪型だけでも知佳みたいにマッシュルームにしようかな」
　まる子は大学で初めて楽器に触れたから、みんなに付いていくために、かなり頑張って練習しているようだった。
　そんなわたしのお城に、たまに母が一人暮らしの娘を心配してというか、悪い虫がついていないか偵察もかねて、泊りがけでやってきて、栄養たっぷりの料理を作ってくれた。
「冷蔵庫にビールと焼酎と納豆しか入ってないて、一体どんな生活してるんや」とぶつぶつ言いながら･･･。そういう状況を知らず、フラッと立ち寄った男の先輩に、母は驚いた様

子だったが、そこは、大人、「いつもお世話になってます」とニコニコ挨拶をした。しかし、彼が視界から消えるや否や、怒気を含んだ声で
「こんな夜中に一人暮らしの女の子のアパートに来るなんて非常識や。何しに来たんや。しかも、なんで『せんだみつお』なん？もうちょいイケてる子はおらんのか。ロックやろ、ロック」
「お母さん、ロックは顔でするもんちがうで。『サンボマスター』っていうバンド、ハンサムいないし」
「例外中の例外や。マニアックなファン、おるだけやろ。不細工で汗臭い男たちの雄叫びなんか聞きたくないわ！ロバート・プラントとかデビッド・ボウイみたく美しい男はいないんか」
「お母さん、いつの時代の話なん？」
　このようにミーハーな母は〇〇モンキーの××和哉なる人物にのめりこみ、彼の誕生日に、父に内緒でピアスなどコソコソ送ったりしていたが、当然実際の恋愛経験は乏しく、その方面のアドバイスを求めてはいけないことを知る出来事があった。ギターの上手な格好いい先輩に珍しくデートに誘われたときのことだ。
　デート当日は彼の誕生日でもあるので、プレゼントを用意しておこうと思った。たまたまアパートに来ていた母と一緒にロフトへ買いにでかけた。わたし自身何がいいかわからなかったのだ。スタイリッシュな彼が喜びそうなマグカップやペン立て、財布などイロイロな売り場を何度もグルグル回ったが決められず、少々疲れてきたとき、母が
「逆に、このアヒルのお風呂セットはどやろ？かわいいで」と幼児向けのおもちゃを勧めた。わたしは何が「逆」なのかよく分からないまま、
「ありだよね」と、とてもいい選択をしたような気になって、可愛くラッピングしてもらい、意気揚々とデートに出かけた。
　初デートは緊張のあまり、鼻血を出しそうになりながら、ギクシャク並んで歩いていた。新しくできた焼ドーナツの店の前に若い子たちが二十人ほど並んでいた。彼が
「甘い匂いがするね。関西で初出店だって」とそちらに足を向けようとしたとき、
「あんなに並んでまで食べる人の気が知れないわ。だいたいドーナツって揚げるものでしょ？カロリー少ないって言ってるけど、カロリー気にするんやったら、ドーナツなんかたべなきゃいいのよ」
「そりゃ、そうだけど」
「一生懸命並んで買っても、食べるの一瞬やし、おなかに入ったら出て終わりよ」
「……。」
　あれっ？これって母の持論だ。母はグルメ番組など見ると、必ずのたまう。
「グルメのこだわりなんてアホの極みや。目が飛び出るようなお金出して、どんなおいしいもん食べても、のどを通る一瞬の快楽や。ウンチになって出て終わり。チャンチャン」
　父にいつも「そんな身も蓋もない汚いこと言ったらあかんやろ」とたしなめられている。母や姉のようになってはいけないと思いつつ、知らず知らずのうちに彼らの毒気に犯されているわたし。やってしまった。後悔先に立たず。覆水盆に返らず。
　彼はドーナツ店に向けた足を急遽軌道修正し、前方をまっすぐ見据えて歩き出した。気まずい沈黙に、雰囲気を変えねばと話題を探す。

「あの、『くるり』のライブ、京都であるみたいなんだけど、一緒に行かない？」
「『くるり』は趣味じゃない。かったるいし」
そのかったるさがたまらないんだけどなと思いながら、
「タケルさんはもっとハードなロックが好きなの？」
「そうでもないけど」
会話が成り立っていない態勢を立て直そうと、目に付いたコーヒーショップを指差して、
「あそこ、今人気のコーヒーショップとちがう？おいしいらしいよ。入ってみる？」
と水を向けたが、
「出たら終わりだからね」とにべも無い。
帰りがけに誕生日プレゼントを渡した。一応ラッピングを外して、中を見てくれたが、彼の目に一瞬嘲りの色が浮かぶのを見て、逃げるように別れた。当然二回目のデートはなかった。「分不相応」と「演技力」不足の相乗不効果とでも言うべきか。ああ、あの黄色いアヒルは果たして彼のお風呂を泳ぐ機会を得たのだろうか。
サークルでは毎年夏休みになると、長野など涼しいところで合宿をした。いくつかのグループに分かれて、即席にバンドを組み、曲を決め練習して、各々の成果を発表し、評価し合うという形のスキルアップのための合宿だ。グループのメンバーが協力して曲を作り、アレンジに工夫を凝らし、演奏テクニックを磨いた。わたしは、ベース、ギター、キーボード、パーカッションというふうに、様々な楽器を受け持って、演奏を楽しみ、割合高評価を得た。
合宿から戻ってすぐ、まる子の部屋に遊びに行ったときのことだ。二人ともまだ合宿の余韻に浸っていたので、話題は当然合宿のことになった。
「まる子のボーカル、すごく迫力あったよ」
「そうかな？知佳こそ何でもこなせて、光ってたよ」
「いろんな楽器に触れられて楽しかったわ。ギターもなかなかおもしろいね」
「そう？ギター、初めてだったの？」
「うん。ベースはメロディー、弾かないからね」
普通にしゃべっていたのに、急にまる子が泣き出した。
「知佳は何でもちょっと練習すればできるよね。ギターもベースもキーボードも。ずるいよ。わたしは必死でやってても、なかなか思うようにできないのに。知佳はずるい！」
「そんなこと言われても…。わたしはピアノやってたから、譜面が読めるだけよ。まる子にはまる子の個性があるよ。自分のスタイル、作っていったらいいんとちがう？」
泣きじゃくるまる子を慰めたものの、いつも冗談を言い合い、仲のよい友達だと心を許していた彼女にいきなり突きつけられた言葉に戸惑った。理不尽な非難だとまる子自身、分かっているはずだ。わたしは彼女にとって一体どんな存在だったのだろう。わたしとお揃いのバッグを買い、同じ髪型にして、屈託のない笑みを浮かべていたまる子の気持ちに無頓着だった自分の無神経さにも腹が立った。人間関係の難しさを久し振りに思い出した出来事だった。
そんなこともあって、少し鬱々とした日々を送っていたとき、後輩の男の子二人から、一緒にバンドをやりませんかと声をかけられた。ギターとボーカルをシロウ、ドラムをタカトが担当し、わたしがベースに入った。シロウが主に曲を作った。コナンのように小柄

な彼は、傷つきやすいオタク人間だが、頭はきれるし、表現したいものも持っている。タカトはでっかい体からパワフルなドラムをたたき出す。サークルから足が遠のき、新バンドの二人といることが多くなった。

バンドの三人は互いに恋愛対象外だったからか、気を遣うこともなく、彼等がアパートに泊まっても、中学生同士のような乗りの健全な関係が保たれていた。

バンド「ミックス・アップ」として、大阪のライブハウスに初めて出たときのことは、今思い出してもドキドキする。一曲目でギターの弦が切れるというアクシデントが起きたのだ。ＭＣで持たすべきところだが、パニック状態のうえにＭＣ慣れしていないので、アワアワと同じことを繰り返し、間が持たず、おまけに音を外すという失敗てんこもりの散々なライブになってしまったが、サークルのみんなが応援に駆けつけてくれたので、大いに盛り上がり、今までに経験したことのない高揚感を味わった。そのときは両親も聴きに来てくれて感激したが、後のメールできつい批評をお見舞いされた。

「ボーカルがちょっと・・・。顎上げて、ひしるから聴きづらかったです。ボイストレーニング必要。曲はいいのに残念ですね。誰か他の歌のうまいボーカル入れて、シロウには曲作りとギターに専念してもらったほうがいいと思います」ここまでの内容にはムカついたが、「ＭＣは気の利いたことを言おうとしないで、曲作りの苦労や思い入れを真面目に言ったらどうですか。笑いをとろうなんて百年早いです」という建設的なアドバイスもあるので、サークルの後輩などの褒め殺しのような感想より参考になることもある。しかし、メールでは標準語になるのがおかしい。

社会人になった現代も、週末はスタジオを借りて練習に励み、月に三、四回はライブハウスに出ている。三枚目のＣＤは某ライブハウスが資金を出してくれて、大阪のタワレコに置いてもらえた。一応プロを目指しているが、なれなくても、音楽に没入するキラキラとしたひとときは何物にも代え難いものだ。今日の姉の結婚式の披露宴のバックミュージックにバンドの曲を使ってくれるらしい。

いろいろあった姉だが、今日は晴れの日を素直に祝福したい。

いよいよ新郎新婦の登場だ。

「あれっ？拓也じゃない。あのちっこいおっさんは誰や？」

一人パニックに陥りつつ、頭の上にハテナマークを出したまま、新郎新婦の名前を確かめる。新郎は「北山達也」となっていた。「タッちゃん、タッちゃん」って呼んでたから、あのおとぎの国の拓也と思い込んでいたのだ。そういえば、半年ほど帰省していなかったから、詳しい話を聞いていなかった。いつのまに見つけたのか分からない、そのちっこいおっさんと並んで姉は悠然と微笑んでいる。

わたしは声を大にして聞きたい。

「どんな選択したんや？お姉ちゃん！」

（了）